

教育長 様

校番 22 吉田 高等学校長
(全日制 課程)

**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る
学科等の特色を生かしたカリキュラム開発研究指定校
令和4年度 実施報告書**

1 学校の教育目標等

<p>(1) 教育目標 探究型の学習を通じて、これからの社会で主体的・協働的に行動する人を育成する。</p> <p>(2) 育てたい生徒像及び学校として育成を目指す資質・能力</p> <p>ア 育てたい生徒像 自らの生き方や社会に関する課題について、解明する方法を探り出し、究め、これからの社会に貢献する生徒</p> <p>イ 育成を目指す資質・能力</p> <p>(ア) 自ら課題を発見し、主体的に学ぶことが出来る生徒 (イ) 高い志と技能を持ち、夢の実現を図ろうとする生徒 (ウ) 地域や他者との協働を通じて、社会に貢献する生徒</p> <p>(3) 学科等の特色</p> <p>ア 探究科 地域から様々な人を講師として招いて「地域人」としての生き方を学んだり、小学校・病院・福祉施設などで実習を重ねる中で人と触れ合う職業の価値観を学ぶことを通して、自己の在り方・生き方を考えながら、社会や地域の課題を発見し解決していく探究的な学習者「探究人」としての資質・能力を育成する学科である。</p> <p>イ アグリビジネス科 地域農業の発展に貢献できる資質や能力を身に付けた人材の育成を目指して、マーケティング分野や商品開発分野に係る学習内容を充実させるとともに、学科の特徴を活かした果樹・野菜の栽培など本校のオリジナル商品を検討・創出し、起業家精神の養成を図る学科である。</p>

2 研究の概要

<p>(1) 学科等の特色を生かしたカリキュラム開発の重点目標 地域を支えていく人材の育成を図るため、本校が示す「探究課題を解決する取組を通して育成する具体的な資質・能力」の向上を目指す地域協働型の教育カリキュラムを開発する。 具体的には</p> <p>ア 「まち」プログラム：集う場づくりから地域活性を図る。 イ 「ひと」プログラム：人と出会い学ぶ場づくりから人材育成を図る。 ウ 「しごと」プログラム：地域を興す場づくりから職業観の育成を図る。</p> <p>という3つのプログラムに特化した学校設定科目において課題発見・解決学習を行うとともに、「総合的な探究の時間」「課題探究」においてそれらの成果を束ね、地域活性化のための新たなアイデアや持続可能な取組を創出する。また、これら一連の取組による生徒の資質・能力の向上を検証する。</p>

(2) 3年後の目指す学校の姿

「探究型の学習」については、「総合的な探究の時間」「課題探究」を中心に展開するとともに、地域とともに開発した「地域協働カリキュラム」を活用する。これにより、生徒一人一人が主体的に地域の課題発見・解決に取り組むとともに、多様な価値を認め、他者と協働して困難なことにも果敢に挑戦することが可能となり、地域に新たな価値を創造する力を育成することができる。

また、教員も、探究型教育カリキュラムに誇りと自信を持ち、生徒の資質・能力を開花させる探究学習を、「総合的な探究の時間」だけでなく、教科横断的な視点を持ちながら、全ての教育活動において実践する。それらの学習成果をポートフォリオとして蓄積していくことで、生徒一人一人の「資質・能力」の変容を学校全体で分析・評価し、好循環のPDCAサイクルを生み出すことができている。

(3) 令和4年度の目標

ア アウトプット（活動指標）

- ・各学科の学科会（探究科では「産業社会と人間小委員会」及び「課題探究小委員会」）が定期的開催され、学科経営計画の初年度における目標値を達成している。
- ・研修会・学科会においてルーブリックで設定されている資質・能力について議論がなされ、より生徒の実態に即したものになるよう議論されている。

イ アウトカム（成果目標）

- ・ルーブリックによる「判断力」の評価結果がレベル3以上である生徒の割合が70%以上になっている。
- ・ルーブリックによる「探究力」の評価結果がレベル4以上である生徒の割合が20%以上になっている。
- ・学校生活アンケートにおいて、「探究的な学び」が身に付いていると自ら実感している生徒の割合が80%以上になっている。

(4) 令和4年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア カリキュラムの核とする教科・科目等名

「総合的な探究の時間」「みつや学」（1年次「産業社会と人間」2・3年次「課題探究」）

イ カリキュラム開発の概要

(ア) 1年次「産業社会と人間」

「探究的な学びの基礎づくり」をコンセプトに、大きく2期に分けて実施する。前半（4月～7月）は2年次以降の選択科目受講に備えたキャリア学習、後半（9月～3月）は探究的な学びの基礎的カリキュラムを展開した。特に後半においては進路希望別に「人間を学ぶグループ」と「地域を学ぶグループ」という2グループに分け、前者においては主に医療・教育・福祉に携わる地域人との交流、そして後者においては地域開発や農業、Iターン移住者との交流を経て、それぞれが「まち・ひと・しごと」の現状と課題を実践的に学ぶ。

(イ) 2・3年次「課題探究」

「医療」「教育」「伝統芸能」など、自らが選択したテーマについて、ゼミ形式で授業を展開し、決定した探究テーマに関する探究の実践を行うカリキュラムを構築した。1学期は、2・3年生合同で取り組む時間を設け、3年生が同じ探究分野に所属する2年生に対して、これまでの経験を活かし自身やグループに対して知識等の伝授を行い、2年生の課題探究に係る活動が円滑に進むようアドバイザー的役割を担うことで、協働的に学びを深めつつ、「まち・ひと・しごと」と自分の生き方を重ねて個人研究を突き詰めていく。

ウ 校内体制

カリキュラム開発を全教員が参画して行うために、年度当初は担当者全員が参加する「産業社会と人間」小委員会及び「課題探究」小委員会を活性化させることや、「探究科推進会議」を月に1回定例開催することを目標としていた。しかし小委員会での連絡事項・確認事項が多くなり、それぞれの担当者の意見を交換する機会が十分持てないことを踏まえ、12月の公開研究会における校内研修、そして1月末の年度末校内研修において各担当者から現在感じている課題を忌憚なく発言していただいたことで、現状と課題の共有を図ることができた。また、年間計画及び目標と照らし合わせた各カリキュラムの進捗状況を確認し、それぞれの科目に係るパフォーマンス課題やルーブリックの検証を行い、問題点・改善点の共有を図った。

(5) 学習評価

ア 知識及び技能

各教科で身に付けるべきとされている知識やスキルについて、十分に習得しているかが評価の対象となる。1問1答形式で測るような単純な知識だけではなく、他の教科の知識とも結びつけて活用できるような概念的な知識も重視した。

イ 思考力・判断力・表現力等

課題や問題に向き合って解決していく能力や、他者と協力して協働的に問題解決の糸口を見つけていく能力、自らの考えを表現していく能力など、課題解決の過程の中で必要とされる幅広い能力が評価対象になる。パフォーマンス課題やレポートなど、各教科の特性に合わせて評価方法を工夫し、「探究の日」や「学習成果発表会」など、発表や質問などの生徒のアウトプットの機会を設けて計画的に評価活動を行った。

ウ 主体的に学習に取り組む態度

知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組の中で、自らの学習状況を把握し、試行錯誤しながら課題解決に向かおうとする姿勢を評価する。見た目の意欲だけにとらわれず、「みつや学」を通してどのような力が付き、どのような課題が見えたかを自己分析できる「振り返りシート」等を活用してきめ細やかに評価した。

(6) カリキュラム評価

蓄積されたポートフォリオを全職員参加の研修会において検証し、「資質・能力」及びそれら进行评估するルーブリック、さらには実施回数などを総合的に議論し、次年度への改善策を見出すように取り組んだ。「産業社会と人間」や「課題探究」において計画的に実施したパフォーマンス課題やポートフォリオを組織的に評価し、生徒自身の「資質・能力」への意識及びその成長の実感を調査することで、その授業における目標が明確になり、より目標・授業・評価が一体化したカリキュラムに近づけることができた。

3 令和4年度の成果及び課題

(1) 成果

今年度3回実施した「学校生活アンケート」において、第1回と第3回の結果を比較したところ「探究的な学習（自ら課題を設定し、それらを解決しようとする学習）にチャレンジしている」が73.6%から83.4%に、「学習課題を深く考え、授業に自ら積極的に参加している」が82.4%から85.9%にそれぞれ上昇している。本校の探究的な学びがある程度定着し、生徒が主体的に学ぶことの意義を実感できているのではないかと考える。また、地域との協働によるカリキュラム開発の点においても「地域と連携した学習を通して、地域社会への貢献意欲を高めている」が最終的に85.9%と高い数値を示しており、成果が形になっていると言える。

(2) 課題

数値的な結果からは主だった課題が見られなかったが、教員からの意見集約においては様々な課題が浮き彫りとなった。特に「産業社会と人間」や「課題探究」など、「みつや学」を担当している先生の中で本校に赴任して1～3年未満の先生方から

- ・どのような力を付ければ「探究」の力が付いたと言えるのか、実感できていない。
- ・他の探究授業はどのようなことをやっているのかが見えにくく、自分の取組に自信が持てない。また前任者の取組についても資料だけではわかりにくく、情報交換の必要性を感じている。
- ・計画の段階で考えていたことと実際に進めていく中でやりたいことにズレが生じる。
- ・外部の方から話を聴くなど「インプット」はある程度充実してきたが、「アウトプット」がまだまだ少なく、生徒自身が自分の学びの質を実感できていない。

といった率直な意見が多く出された。年度ごとに教職員も変わっていく中で、いかに教員間の協働体制を構築していくかが大きな課題である。

4 令和5年度の目標及び取組内容

(1) 令和5年度の目標

ア アウトプット（活動指標）

- ・各学科の学科会（探究科では「産業社会と人間小委員会」及び「課題探究小委員会」）が定期的開催され、学科経営計画の目標値を達成している。
- ・研修会・学科会においてルーブリックで設定されている資質・能力について議論がなされ、担当者それぞれが個別・具体的に感じている課題を共有し、より生徒の実態に即したものになるよう議論されている。

イ アウトカム（成果目標）

- ・ルーブリックによる「判断力」の評価結果がレベル3以上である生徒の割合が80%以上になっている。
- ・ルーブリックによる「探究力」の評価結果がレベル4以上である生徒の割合が30%以上になっている。
- ・学校生活アンケートにおいて、「主体的・対話的な学び」が身に付いていると自ら実感している生徒の割合が90%以上になっている。

(2) 令和5年度のカリキュラム開発の内容及び校内体制

ア カリキュラム開発の概要

(ア) 1年次「産業社会と人間」

「探究的な学びの基礎づくり」をコンセプトに、前半（4月～7月）は2年次以降の選択科目の受講に備えたキャリア学習、後半（9月～3月）は探究的な学びの基礎的カリキュラムを展開する。特にアグリビジネス科との学科横断的な視点に立ったコラボ授業においては、実施時期や指導体制を大きく見直し、探究科・アグリビジネス科それぞれに探究的な意義のある講座にする。また今年度同様に9月以降は進路希望別に「人間を学ぶグループ」と「地域を学ぶグループ」という2グループに分け、前者においては主に医療・教育・福祉に携わる地域人との交流、そして後者においては地域開発や農業、Iターン移住者との交流を経て、それぞれが「まち・ひと・しごと」の現状と課題を実践的に学ぶ。

(イ) 2・3年次「課題探究」

「医療」「教育」「伝統芸能」など、自らが選択したテーマについて、ゼミ形式で授業を展開し、決定した探究テーマに関する探究の実践を行うカリキュラムを構築する。1学期は、2・3年生合同で取り組む時間を設け、3年生が同じ探究分野に所属する2年生に対して、これまでの経験を活かし自身やグループに対して知識等の伝授を行うなど「アドバイザー的役割」を担うことで、協働的に学びを深める。

また異学年間における縦の関係については、「探究の日」として節目となる行事を設け、発表を行う当該学年のプレゼンテーション能力を向上させるとともに、発表を聴いて評価する側の学年の「聴く力」や「質問する力」について議論を深め、相互作用として議論の質を向上させながら「まち・ひと・しごと」と自分の生き方を重ねて個人研究を突き詰めていくことを目標とする。

イ 校内体制

これまでに作り上げてきたカリキュラムを全体で共有し、吉田高校としての組織的な取組として確立するため、年3回計画している校内研修会を「合同教科会・合同『みつや学』小委員会」と位置付け、担当者それぞれが個別・具体的に感じている課題を共有し、より生徒の実態に即したものになるように議論して年度末には成果と課題を整理し、全体にフィードバックする。